日本の風景

常務理事　　寺川　彰

天体自然の規則的な循環にも似て、文明の歴史にもＤＮＡの二重らせん構造のような興亡のサイクルが繰り返されているという。その変移点では怒涛のような急激な時代の変化がかいま見られる。

近代日本では明治維新がそうであった。欧米の侵略の危機を予感した若い志士達が国を動かして王政復古をなしとげた。新政府は中央集権制確立のために矢継ぎ早に版籍奉還、廃藩置県の大改革をなしとげた。全国の士族の数は 190 万人、当時の人口３千万人の 6.3%の人間が職を失った。264 年の長きにわたり、国を支配してきた藩主、家臣団が自らの地位も身分も領地もすべて放棄して新制度を受け入れたのは、ひとえに天皇への畏敬と公に奉ずる武士道精神の発露によるものであったに違いない

第２の変移点は日本の敗戦である。

ＧＨＱは占領政策を成功させるために、主権の存する国民の総意に基き、日本国民の統合の象徴である天皇を存続させた。日本国民は、この条件によってのみ、その他のすべてを失っても無抵抗で敗戦を受け入れたのである。それ故に、日本国民を醸成してきた国家意識につながるすべてのものが排除された。日本人の道徳教育の理念を示した教育勅語は教育基本法から外された。そして民族の伝説、神話、文化を伝える歴史や国民の道徳規準を示す修身は教科から外され、社会科の一部に埋没させられた。

新憲法９条によって、陸海空軍その他の戦力は、これを保持せず、国の交戦権は認めず、自力で守るべき国を失った。

かくして、普遍的な個人の自由、平等、権利を謳い上げた民主主義国家が誕生した。

戦後の日本の経済的復興はめざましく、ひたすら物質的繁栄を追い求めてきた。その豊かさを極める一方で、心の豊かさが失われるようになった。

1980 年以降、何かが狂いはじめ、家庭も学校も企業も少しずつ崩壊が始まった。いまやその混乱状態は、親子、夫婦間の殺人という信じられない人間崩壊、大手, 中小を問わない企業のモラルの欠如、そして学級崩壊、イジメ自殺の問題等、目を蔽うばかりの状態にまでひろがっている。

何が日本をこれほどまでに変えてしまったのだろうか。　それは、戦後 60 年かけてかもしだされてきたもの、個人の生き方の規範となる道徳、倫理観の欠如によるものではなかろうか。個人は一人では生きることができない。公的な社会の中で人とのつながりの中で支えられ生かされている。公の形は、家庭であり、学校であり、地域ふるさとであり、国家である。これら公的なものとの関わり合いにおいて、個は自らの自由を抑制し、責任をはたし、義務を遂行しなければならない。欲望の赴くままに行動し、守るべきルールを知らない幼稚な個性も、個の人格として尊重された結果が今日のような人間の荒廃をもたらしたのではなかろうか。

私が子供の頃、家庭にも学校にも守るべきルールがあり、礼儀正しい雰囲気と秩序があった。祝祭日には式があり、教育勅語が朗読されたが、その内容は、自分自身を高めるための行動が極めて具体的な形で示されており、素直に受け入れられた。

日本の伝説や歴史、神話は、様々な形で家にも町にも溢れていた。私の胸の中では、日本の歴史も道徳も武士道も儒教や仏教も、自分で納得して汲み上げた範囲で、矛盾なく溶け込んで生きるための私の価値観が形作られてきたと思うのである。

平成７年にハートの会が発足した。この頃、日本はバブルが崩壊し、暗い予感が漂い始めた頃であった。今、全ての面で固有の価値観が大きく揺らぎ始めている。

第３の変移点は今なのではないか。呆然として手を拱いているときではない。私達の子や孫にとって、それは同時に私達にとって待ったなしの現状なのである。私達が培ってきた道徳観や社会通念を育くみ、次の世代に継承するために、今できることを身のまわりのことから行動すべき時ではなかろうか。